

# 犯罪心理学

Keywords : 非行・集団過程・社会的アイデンティティ

## 研究概要

犯罪心理学と聞くと、犯人は誰かとか、犯人の心の内を言い当てるといような研究をしているのではないかと思われることがありますが、決してそうした研究をしているわけではありません。犯罪心理学は心理学の一領域であり、理論に基づいた仮説と定量的データをもとに、犯罪に関する一般傾向の抽出を試みます。そして、そこから犯罪や非行のような反社会的行動がなぜ生じるのか、そして、そうした行動にはどのような意味があるのかということ考察します。

## 研究テーマ

大学院時代から継続しているテーマは「集団と非行」です。少年犯罪の特徴のひとつは、集団性にありますが、なぜ集団で非行に関与するのかということ少年たちの集団内における相互作用過程（特に、少年たちの社会的アイデンティティ）に焦点をあてて検証してきました。また、非行に積極的に関与するような集団に身を寄せるのはなぜかということ少年たちが所属する集団とそれを取り巻く集団（例えば、同級生や家族、地域住民など）との集団間関係に焦点をあてて研究をしています。

現在は、以下のようなテーマにも関心を持っています。

- ✓ 自己統制の特性的側面と状況的側面
- ✓ 地域住民による出所者の受容過程
- ✓ 非人間化と処罰動機
- ✓ 社会的排斥と関係再構築
- ✓ サイコパシーの社会適応性

心理系専攻 犯罪心理学研究室

講師：中川知宏（なかがわ ともひろ）

HP:QRコードを読み取ってください

E-mail:tnakagawa@socio.kindai.ac.jp



## 論文・書籍

中川知宏 (2016) 犯罪心理学事典 丸善出版 村松励ほか(編) 分担執筆 (低自己統制理論, 非行集団, 文化的逸脱理論を執筆)

中川知宏 (2016). 非行集団と暴力犯罪. 大淵憲一 (監修) 紛争・暴力・公正の心理学, 北大路書房.

中川知宏・林 洋一郎 (2015). 自己統制が逸脱行動実行意図に及ぼす効果：自己統制の特性的側面と状況的側面. 近畿大学総合社会学部紀要, **4**, 85-94.

上原俊介・中川知宏・田村達 (2015). 怒りの利己性：公正敏感さは怒りの道徳感を誘起するか. 実験社会心理学研究, **54**, 89-100.

中川知宏 (2010). 集団非行の発生過程：非行の集団過程モデルの実証的検討. 青少年問題, **57**, 26-31.

中川知宏 (2010). 青年期の集団と非行：非行の集団過程モデルの検証. 東北大学文学研究科博士学位論文. 2010年6月授与

## 趣味

趣味と言えほどのものはありませんが、お酒は大好きです。大学院時代、長らく住んでいた東北地方（仙台市ですが）は米どころであり、

水どころでもあったので、日本酒のバリエーションがとても豊かです。それもあってか、お酒の中でも日本酒とビールが特に好きです。

ちなみに、東北地方では、9月から10月にかけてコンビニに薪が置かれるのですが、これは河原（仙台では広瀬川あたり）で芋煮会なるものがあるためです。要は皆で温かい芋煮<sup>1</sup>を食べて、お酒を飲んで親睦を深めようという企画です。当然、大阪では芋煮会はないので、秋ごろになると仙台が恋しくなります。

### 研究室について

当研究室では、3年時から卒業論文に向けた取り組みを実施しています。3年生前期は、犯罪心理またはそれに関連する学術論文（英語）を各自で探して、読むところから始まります。後期は、前期に読んだ論文をもとに研究計画を立て、指導教員を始め研究室のメンバーとの議論を通じて、研究計画を改善していきます。4年生になると、調査あるいは実験的手法に則り、データの取得を開始します。そして、分析、結



ゼミ合宿での集合写真（2015年8月）

<sup>1</sup> サトイモを中心として、色んな具材を鍋に投入するが、宮城県と山形県ではレシピが微妙に異なる。例えば、宮城は豚肉や野菜を味噌で煮込むが、山形では牛肉やその他の野菜を醤油で調味するのが一般的である。そのため、しばしば県民同士の葛藤が生じる。

果の集約、考察という手順を踏んで論文の形に仕上げていきますが、その過程において研究会や合宿での発表を行います。

当研究室では、他領域の研究室や他大学との合同研究会や合宿を行っていますので、そうした場に参加し、発表を行うことでふだんとは異なる視点からの議論を通じて、ふだんは考えなかったようなことを再考する機会にしてほしいと思っています。

また、通常の演習以外に年に数回ほど、学生有志を募り、犯罪や非行に関連する専門機関で課外学習を実施しています。具体的には、少年鑑別所刑務所、裁判所、地方検察庁などです。こうした課外学習を通じて、決して犯罪とよばれるものは私たちと縁遠いものではなく、加害者にも被害者にもなりうるということを知ってほしいと思っています。その上で、犯罪や非行に関与した人たち（同様に、被害にあった人たち）がどのような経緯でそこに至り、どのように考えているのか、そしてどのように処遇されて、社会に復帰するのかということを考えてほしいと思っています。

### 卒論題目

- ◇ ストレインと非行の関係—社会的絆は調整要因となりえるか—
- ◇ 社会は出所者を受け入れるのか？—出所者との絆の再構築—
- ◇ 犯罪不安が犯罪数推定に及ぼす影響—調整要因としての集合的効力感—
- ◇ 社会的排斥が受容・排斥サインへの注意に及ぼす効果—制御焦点による影響—
- ◇ 公正世界信念への脅威によって非人間化は生起されるのか—自己制御資源と道徳的解放から迫る—
- ◇ Cheater's high（悪事による気分高揚）—規定因としてのスリルと自己正当化—